

槐

かい

岡井省二創刊

平成22年12月号

平成二十二年十二月一日発行 第二十卷第十二号 通巻第三三四号（毎月一回一日発行）
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



寝顔

高橋将夫

万物の寝顔を月は知つてをる
半分は秋となりたる秋の山
龍田姫を招き入れたる野点かな
秋の灯にこの世の塵のかがよへる

不知火の中の一つは焼耐火
天の川に翼を休め白鳥座
秋天や伏流水に濁りなく
どぶろくや喜怒哀楽のなき悟り
デジタルがアナログとなる秋の虹
人生の方程式を解く夜長
十五夜の月を画竜の瞳とす

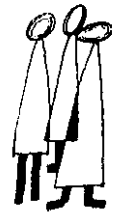
槐安集

水野恒彦

白朝顔になにかが終はり省二亡し
カンナ燃ゆ残され詩は吾^あが挽歌
銀箔をのべゆく月の無音界
銀河濃し人体に骨ゆきわたり
白秋や輩^{ともから}一人燃やすべく

延広禎一

鯛の目に大日おはす省二ノ忌
体内の音すべて消し月見かな
角切の鹿アキレスのごと跳ねし
恐龍の卵かへるか秋炎暑
鯤化して鵬となりたる省二ノ忌



加藤みき

鬼薊に浮雲ひとつ留まりぬ
珊瑚樹の実のてりてりと信太妻
秋天や天空に向く釜の飯
秋の昼勾玉になほ触れたがる
潮風のオリーブの実の赤青黄

石脇みはる

大盛の白磁の皿のマスカット
月の客いつもの赤いベレー帽
秋の夜長西太后のものごたり
異次限に同じものなき寒露かな
葦の花空にまあるき煙立つ

中島陽華

色鳥や少年めがねはづし来る
石積みに笑ひありけり秋涼し
年月の家洗はれて秋澄めり
穴惑コンパスを持つ女かな
秋入日天竺木綿干されある

竹内悦子

シャンパンの瓶は長靴秋暑し
古着屋に解体新書小鳥くる
竹林の奥の明るき施餓鬼かな
鈴成りの銀杏徳川美術館
烏瓜に届かぬ佛心かな

栗栖恵通子

お新香のつながつてをる十夜かな
ロードショーの半券出て来秋袷
筒袖を合はせてたたむ今日の菊
ものさしの目盛の紅し鳥わたる
省二忌の沖くれなぬに日本海

大島翠木

文弱に産んで貰ひし天の川
角砂糖二つと言ひし白露かな
蹠跟と曼珠沙華の国にゐる
ふるさとの月のダムより大癒見^{おおべしみ}
過客なる雲名月を連れてゆく

雨村敏子

無花果のへそをつくづく省二の忌
木の実降る音彼方の森深く
悼森澄雄氏
初風や青菜にがんもの黄金いろ
漱石の顔の向かうの野分晴
鬼の子の吹かるる音に耳澄ます

小形さとる

しんしんと空蟬鳴ける日なりけり
現うつにも海坂燃えて地藏盆
どれもこれも道を教へぬ道をしへ
ただ暑く貧しき国となりにけり
大鏡蟋いとど蟀の夜となりぬたり

本多俊子

雁渡る遠き大河の音連れて
玄黄の間に鬼の子下くだりけり
桔梗や五常のいろといふべかり
鱗雲石白を挽く母の音
地球儀をぐるりと廻し秋愁ひ

久津見風牛

体内の段差に秋明菊を置く
葉は花に次元の異ふ曼珠沙華
いぼむしり湯灌させやうか髭剃ろうか
母の黙夜露したたり始めたり
混沌の野に秋耕のひとりかな

近藤 きくえ

秋暑し池の吐息か泡生る
石棺に鈍き日の差し真葛
秋口のからだの芯のほてりかな
もの音に五感の聴き長き夜
水音きくごと岩の上の黄鵠鴿

近藤 喜子

曼珠沙華たどり太子に辿りつく
秋光や水の扉の開きたる
紅鷗の澄む声カストラートかな
邯鄲の喉の中しるがねの玉
あめつちの黙に堪らず蚯蚓鳴く

谷村 幸子

秋日和重き扉の軽くあく
当尾^{とうの}なる笑ひ仏やねこじやらし
存分に日を受け今日の酔芙蓉
もらひたる瓢の実ひとつ足軽し
紅白の萩の花めで閻魔堂

瀬川 公馨

楠の実のこぼれこぼれてみたりけり
同行の頭陀袋なり草紅葉
せからしか上布の衿のゆるびたる
夜の秋脇に根付の縁起物
猫の鼻面くすぐつてをる露の玉

久保東海司

ひらひらと鱗うろこの泳ぎも暑に耐えて
送行や草の触れぬるふくらはぎ
正面の滝正面に見据えたり
夏つばめ砂州へ反転しては舞ふ
流燈の火種流燈より貰ふ

松原仲子

団栗をいくつも落す夢の端
鉛筆を束ねて削る九月尽
ひさびさの人待つかかなしぐれかな
寒蟬や地球はいつも熱うして
あをあをと灯ともしごろの鉦叩



槐市集

松下八重美

明け方の頭上に激し秋の雷
さまざまな岩塩並ぶ萩の庭
草を食む牛の鼻先蝗とぶ
校庭に声の高まる秋の暮
秋灯下二文字熟語のパズル解く

松本桂子

赤とんぼどれも低くて頼りなき
櫛木の実貸めがねにはピラ付いて
拾ひたる栗の実ひとつ捨てられず
烏瓜向こうの岸にあつたはず
このとしの秋明菊のあわれさよ

柳川晋

秋光の卵を解すさざれ波
月代や地には素数の魔法陣
てつぱんや浪花の秋は芳かばしき
上六を抜けて七坂星月夜
待宵や人に魔除の逆柱

柳橋繁子

文の助茶屋に長居の秋日かな
秋暑し醍醐の杜の力水
姿よき見越しの松や新松子
箒目の川の流れや初紅葉
短日の下校のチャイムけんけんぱ



槐集

高橋将夫選

竜雲を解ほぐして淵に潜みける 守口 柳川 晋

蛤になれと選ばれたる雀

胞衣笑ひ響きて鬼の子が一つ

胞衣笑ひ＝胞衣を埋めた者が笑ってゆるる隠語

月白や上目遣ひの大獅噛

恋しくば尋ぬるあては狐花

秋耕のヒト科ヒト属ヒトとして

枚方 中野 京子

もろもろの支柱をぬきて秋隣

通草伐るむらさきいろの思ひかな

言の葉は心の線よ水引草

舞終へし扇あしを置きて逝きにけり

桃啜る漢無防備なる背せ中 摂津 中田 禎子

子の背せにいつも赤子や蕎麦の花

急かさるる気分となりし法師蟬

合掌の手足なりけり蟬むくる

遙かより遺伝子来たり運動会

野分して加藤楸邨過よぎりゆく 東京 西村 純太

秋の蚊の涅槃ねはんに宿るすべもなく

南溟なんめいに渦巻く供花や曼珠沙華

几の上の顛頂てんていの影や居待月

かなかなやものみな鎮む夕映えて

おほぜいで来て秋風のひとりかな 高松 十川たかし

栗飯の栗はるかなる母の故郷こきやう

昔からあまざけ作りつづけたる

あかつきの無花果むぎわみんな上向きに

地に落ちて薯いもの貌するむかごかな

吹きわたる風の刹那せつなや稲の花 枚方 富松 寛子

八月はパッチワークの絵のやうに

重陽のささに浸して鯛の鯛

永遠の母なる微笑合歡は実に

空蟬のいのち支へし形かな

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

竜雲を解して淵に潜みける 柳川 晋
竜が雲間から降りてきて淵の底に潜ったという。「雲を解して」の表現が、何か問題が解決されたようでおもしろい。「竜天に登る」が春の季語なら「竜淵に潜む」は秋の季語。
〈恋しくば尋ぬるあては狐花 晋〉

秋耕のヒト科ヒト属ヒトとして 中野 京子
秋耕の人を見て、農耕民族としてのものもろの歴史、そこに至る人の長い進化の過程を思い浮かべる作者の視点に舌を巻く。目の前で黙々と耕している人も、その歴史の中の一人なのだ。ちなみに、生物学上の分類では動物界、脊椎動物門、哺乳綱、霊長目、真猿亜目、ヒト上科、ヒト科、ヒト属、ヒト種ということになる。

桃啜る 漢 無防備なる 背中 中田 禎子
なるほど、桃を啜っている男の背中は無防備といえる。なんかエロスを感じさせる一句。
〈はるかより遣伝子来たり運動会 禎子〉

かなかなやものみな鎮む夕映えて 西村 純太
夕映えに蝸の声がひときわ哀調をおびて聞こえてくる。そんな静けさに、うつすらと闇が近づいてきて、全てが鎮まるさまが

ひたひたと伝わってくる。

地に落ちて薯の貌するむかごかな 十川たかし
こぼれた零余子が土の上で薯の顔をしているようだという。小さな零余子が見栄を張って大きな薯の仲間のような顔をしているのか。いや、郷に入りては郷に従えで、土の上では薯にならなければと思っているのか。いずれにしてもおもしろい。

八月はパッチワークの絵のやうに 富松 寛子
パッチワークは色や大きさのさまざまな布片を繋ぎ合わせて、変化に富んだ模様を作り出す手芸。なるほど、言われてみれば、夏はそんな感じといえよう。

気まづさが氷菓溶かしてしまひけり 近藤 紀子
気まづい沈黙におかまいなく、かき氷はどんどん溶けてゆく。そんな氷を見ながら、気まづい沈黙の時が流れてゆく景。自分にもそんな経験があったような気がする。

無花果完熟す混沌の 下天に 近藤 公子
無花果完熟して食べごろ。しかし、混沌の下天ということになると、話は天界に及ぶ。四王天の一昼夜は人間界の五十年にあたるという。無花果までもはかない象徴に見えてくる。

今昔を呑んで 平らや 秋の海 大山 里
波もなくおだやかな秋の海。今も昔もかわらない静かな海の姿。
〈今昔を呑んで〉の措辞が素晴らしい。
〈はじまりもをばりもボレロ破壊 里〉(以下略)